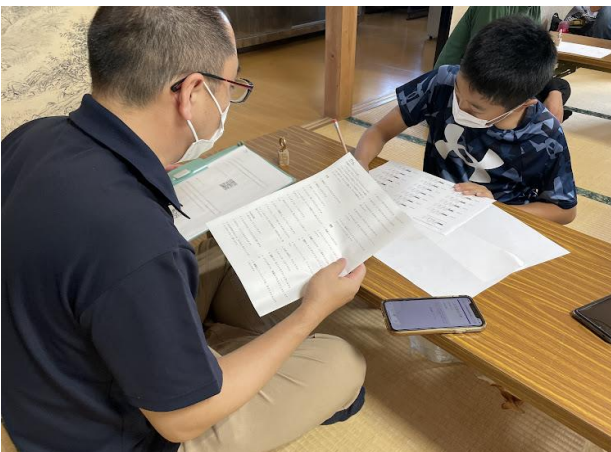


2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/25

団体名		NPO法人ホールアース研究所		活動タイトル	発達障がい児向けの自然体験プログラム及び効果測定手法の開発							
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）					■活動風景							
●望ましい社会状況（ビジョン）		障害のあるなしに関わらず、子ども達一人ひとりの多様性が発揮・尊重され、障害者は精神的および身体的な能力を最大限発達させることができるような教育や福祉を受けることができ、自由で民主主義な社会により主体的に参加することを目的に、障害のある者と障害のない者が隔てなく共に学ぶことができるインクルーシブな社会状況。			10月2日に実施した『親子でカヌー体験』 本栖湖の上でドキドキしながら親子で協力して漕いでいました。終わった後はやり切った感が伝わる笑顔でした。 							
●団体の社会的役割（ミッション）		団体が目指す社会像は、「一人ひとりが『人・自然・地域が共生する暮らし』の実践を通じて、感謝の気持ちと誇りをもって生きている」である。 その実現のため、 ●誰もが自然・地域の一員であることを自覚し、それぞれの立場で行動している。 ●地域の生物多様性が、維持・回復に向かっている。 ●地域で多様な生業が成り立ち、定住・交流人口が増え、文化が価値あるものとして継承されている。										
●団体の活動基盤		●望ましい人的資源： ＊発達障がいに関する専門家3名／指導・助言 ＊正規職員2名／プログラムの準備・実施 ＊アルバイトスタッフ1名／記録及び情報発信 ＊ボランティアスタッフ5名／当日運営サポート ●望ましい物的資源： ＊バリアフリー型のキャンプ用品30名分 ＊カヌー＆川の自然体験用資材30名分 ＊食の体験用30名分の道具一式 ＊情報発信可能な記録及び通信機器一式 ●望ましい活動資金： ＊専門家への謝金及び旅費交通費 ＊プロパーの準備・運営に関わる人件費及び交通費 ・正規職員2名分（準備及び運営）×回数 ・アルバイトスタッフ人件費 ＊アルバイトスタッフ／昼食及び旅費交通費 ＊プログラムに関わる消耗品費 ＊PRに関わる印刷製本費、通信運搬費 ●望ましい情報： ＊運営及び安全管理マニュアルがある。 ＊一般向けにホームページやSNSでの情報発信 ＊行政や関連機関でのチラシの配布 ＊発達障がい児関連の団体及びサークルへ情報提供										
■活動内容			■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			7月17日『おもいきり川遊び』 この回から採用した『リッカート尺度』をアンケート用紙タイプにして試みている様子です。 （左）静岡福祉大学齋藤先生 						
●自然体験プログラム実施 親子向け自然体験プログラムと1泊2日のはじめてのお泊りキャンプを実施した。 ●上記のプログラムが発達障がい児に与える影響について検討 プログラムの前中後で気分（覚醒度と快適度）と、前後で学校生活に対する自信度をアンケートで検討した。前者はこのプログラムが児童にとって情緒面でどのように受け止められているのか、後者は、学習、友達関係、運動、自己評価に対する自信度の変化を見ることで心理的な効果があるのかについて考察するために実施した。今回は学校生活に対する自信度の測定方法について視覚的に分かりやすく表現することでより正確にその時の心理状態を答えられるように工夫した。 ●報告チラシ作成及び配布 21年度活動内容を元に簡易報告用冊子の改定し、関係団体・企業へ発送した。 ●サポート団体及びボランティアの獲得 ボランティアの育成にも着手し、報告用冊子を持参し、企業回りの実施した。			●自然体験プログラム実施。 ①開催：5回実施。（内4回が日帰りプログラム、1回がお泊りキャンプ）（回数は予定通りだったが、日帰り4回目の川遊びは川の増水の為代替え案で実施） ②目標アウトカム「プログラムのリピート率が上がるについて」リピート率は80%を達成 ●発達障がい児に自然体験が及ぼす効果測定。 ①実施：目視での測定方法を2回と携帯端末を使用しての測定を3回合計5回実施。 ②目標アウトカム「プログラム後のリラックス感や自己肯定感が高まるについて」参加者の60%以上が1段階以上up。（半数超が1段階以上） ●報告チラシ作成及び配布。 ①改訂数:1回(配布数61箇所)②情報提供の希望関連団体:希望数10件いいね数:139件 ●サポート団体及びボランティアの獲得 ①関連団体・企業訪問：計11社。ボランティア講習会2回開催。 ②支援いただける団体：2社獲得。ボランティア同意書10名提出。									
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題			■活動成果のアピールポイント（自由記入）						
●児童コンピテンス尺度の測定について 児童用コンピテンス尺度とは、学校における学習、友達関係、運動、自己評価に対する自信度をみるための尺度である。この尺度は、ある質問項目に対して、「いいえ」、「どちらかといえばいいえ」、「どちらかといえばはい」、「はい」の4つから選択して評価するものであるが、低学年の子どもや発達障がい児によっては、「いいえ」、「どちらかといえばいいえ」の微妙な違いを認識できない可能性があった。そのため、「いいえ」から「はい」まで黒から白へのグラデーションで表現して、色の濃淡で感覚的に指差して答えられるように工夫して行った。明らかに文字情報だけだった時に比較して異なる結果となった。感覚的に選択しやすくなった可能性が考えられた。 ●1泊2日で開催したキャンプで焚き火を囲んで講師と対面の雑談の時間をそれぞれの家族で実施した。 雰囲気づくりになればと考えていたが、焚き火の効果もあってか普段聞けないような悩みなどが溢れて来て「とてもいい時間だった」と感想を話してくれた家族もいた。 非日常の体験がいい意味で作用してくれた。次回はもう少し長めに時間を設定する予定 ●ボランティアさん各回2名～5名がプログラムに参加してくれる事で各所に目が届き、参加者からも安心の声が聞かれた。私たちボランティアさんの協力がある事でスタッフのみでは実現が難しい内容にも打ち合わせを緻密に行う事で実現できた。			当団体のビジョンとミッションを踏まえ、今年度は「自然体験プログラム実施」「発達障がい児に自然体験が及ぼす効果測定」「報告チラシ作成及び配布」「サポート団体の獲得」を実施したが、以下の課題が明らかになった。 ●「自然体験プログラム実施」では、天候によりプログラムが変更になると不安定になる子もいた。別の場所と同じ活動ができるような所を確保したり、変更の可能性が多いプログラムでは活動日を2日間取るなどについて、今後の対策を検討している。 ●「発達障がい児に自然体験が及ぼす効果測定」では、携帯端末を使用する為、通信障がいのリスクはあるが、紙を使用した測定方法に一部変更したため、多少軽減した。 ●「報告チラシ作成及び配布」では配布団体を精査した結果、61社であったため、来期補う形で広報に力を入れていきたい。「サポート団体の獲得」は増えてきているものの、参加者が増えてきているため、人材不足が課題であることから、来期も引き続き、講習会を開催して担い手を育成する。また、活動の認知度を向上させるための対策について検討する。			この1年間の活動を通じて			参加者のリピート率が80%及び参加者全体の87%で自己肯定感の向上		を達成しました。	
						■受益者の具体的な変化（自由記入）						
						・活動前日まで学校へ行くのが怖くて泣いていた中学1年生の男の子、洞窟探検後の月曜日は泣かずに、怖がらずに行くことができました。と本人もお母さんも驚いていました。本人は洞窟効果と呼んでいる。 ・姉妹で参加している場面緘黙の女の子（姉）活動中も発言はなし、最後の何が一番楽しかった？の質問で『洞窟！』と大きな声で答えてくれた。						